

中山人形「塙保己一像」 補修作業報告

山本 丈志*



写真1 塙保己一像（補修前）

1. 経緯

令和3年8月、秋田県立博物館民俗部門の丸谷仁美副主幹から割れた八橋人形の補修について相談を受け、補修作業を手伝った。その際に彼女が調査研究を続けている中山人形についても傷んでいるものがあり、補修したいとの意向を聞いた。だがその人形は博物館の収蔵品ではないというので、陶像の完全な修復ではなく、鑑賞に堪える最小限の補修を施すということを所蔵者了承の上で、補修作業を引き受けた。

ここでいう最小限の補修は、将来本格的な修復作業が行われる際、その障害にならないよう補修部分が除去できるようにしたことである。八橋人形の補修に際し行った、欠損、破碎部分の砥の粉と膠による充填、顔彩による補彩を同様に行うこととした。事前には陶像の状態が「割れている」という情報しかなかったので、細部について実物を確認しながら作業にとりかかった。

2. 人形について

補修する陶像は「塙保己一像」（写真1・口絵）で秋田県横手市で製作されてきた郷土人形「中山人形」である。製作者は樋渡瓦山（本名義一）で陶像の背中に陰刻による款記があった。丸谷副主幹の調査によると、昭和6年に横手市の書籍店大澤鮮進堂堂主大澤堅治が秋田盲啞学校（現秋田県立視覚支援学校）へ寄贈したものだ（註1）。

塙保己一が総検校になった時の正装（白頭巾は古代羊形金欄織、上着は赤地雲立湧模様、着物は白綾子綾織、右手に持つ扇子中啓は表が金、裏が銀の無地紙）を模して作られていると考えられる。同校では鍼灸師として著名な杉山和一と長く誤認していた。

平成23年の東日本大震災で破損したと聞いていたが、補修後、昭和58年の日本海中部沖地震で破損したと訂正があった。学校職員によって、一度ないし二度ほど補修が行われていることが接着剤やテープの使用状況からわかった。陶像のデータは以下の通りである。

製作者 樋渡瓦山

製作年 1931（昭和6）年

材質 陶土焼成・着色（水干、膠）

大きさ 高さ20.4×幅27.0×奥行き16.5cm

款記 「寄贈 羽後横手町 鮮進堂 大沢堅治
昭和六年十一月 瓦山 墨書印〔瓦山〕
謹作」陰刻（写真2）



写真2 背中の款記
横に真っすぐな亀裂と網目状に固着した粘着剤

3. 現状

人形は陶器に胡粉と朱の下塗りをしてから彩色している。膠の経年劣化により表層の絵の具が浮き気味だったが、その下はある程度定着力があり、特に保存処置はしなくても済みそうだった。補彩に使う顔彩を薄く塗ることにすれば、下地の絵の

*秋田県立博物館

具の膠より粘度が低くなり、将来的に除去する際、下地の損傷は最小限に抑えられると考えた。

破損状況と過去に行われた修復については下記の通りである。

- ①震災による転倒または落下で胸部が割れて、複数の破砕片が飛び散ったようだ。亀裂はほぼ真っすぐ横に走っているので(写真2,3)、作る際に陶土を継ぎ足した部分だと考えられる。また上着の左袖付近に2箇所、破砕片が失われた欠損部分があった(写真4)。

胸の部分はゴム系の接着剤を使用したようで、固着部分は黄色味を帯びた褐色だった。おそらくコニシ「ボンドG17」だろう。複数回にわたり、接着剤を多量に盛ったため、接合面が密着できなくなり亀裂の溝が残った。小さな破砕片も亀裂に入りきらず、浮き上がったまま接着されていた。

- ②接着後、布製のガムテープ或いはセロテープなど、複数の種類のテープで直貼りし固定していたようで、粘着剤が残っている部分と絵の具が変色した部分が確認された。布製ガムテープの粘着剤は網目状に盛り上がり固まっていた。変色部分は絵の具の中に粘着剤の薬剤が浸透しているようだった。

- ③袴と扇子の間、上着の襷には積もった綿ゴミが付着していた。全体的に煤を被ったような黒い汚れがある。特に上着の襷は汚れていた。

- ④現在の中山人形はアクリル系の塗料が使われているが、この陶像は伝統的な日本画の絵の具で



写真3 正面の亀裂



写真4 左袖部分の欠損

ある水干を膠で溶いたものが使われていた。もちろん水溶性なので湿らせた綿棒には多少色が付着する。すでに製作から90年余りが経過し膠が変性して固着力を失い、顔料が表面に浮いている所がある。上着の雲立湧模様が消えている部分は単純にほこりを払うための乾拭きでも顔料が落ちてしまうほどだった。写真3の着物、上着の紋様が消えている部分はすでに絵の具が落ちてしまっていた。

4. 補修作業の実際

- ①令和3年10月6日

- ・3種類の大きさの綿棒を精製水で湿らせ、陶像の表面全体をクリーニング。表面の絵の具が多少落ちるところがあった。上着の朱色、特に右後部分が落ちやすく膠がほとんど効いていなかった。陶像は下地に白(胡粉)、その上に朱色が塗られている。顔部分は白の上に肌色が塗られていた。顔には煤のような黒い汚れが付着していたので綿棒で取り除いた(写真5-1, 5-2・口絵)。
- ・固まった布製ガムテープの粘着剤はペインティングナイフで削ぎ落とした(写真2, 6)。絵の具の中に浸透したと考えられる粘着剤については未処置である。
- ・袴と着物(白+黒で調色)、上着(朱色+黄土+茶色+白で調色)で補彩を試した。
- ・胸部の接着具合を再確認。ボンドの融解など物理的な引きはがしは本体のダメージが大きいと判断し今回は手を付けず、このまま補修することにした。

- ・湯煎で三千本膠1本を水60cc程度に溶解。気温が低くなっているので常温で保存。



写真6 正面の亀裂

②令和3年10月7日

- ・砥の粉に膠、水を混ぜ成形しやすい程度に固める。上着の左すそと袖袂の欠損部分を成形する(写真7)。そのままと本体には付着しないのである程度乾いてから膠で接着した。背中 of 落

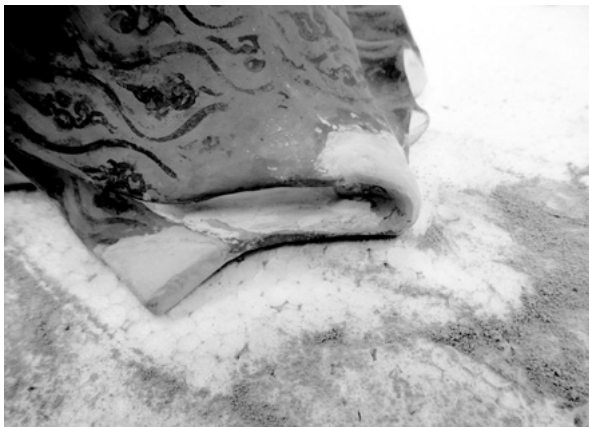


写真7 左袖欠損部分の成型



写真8 胸部の溝に砥の粉を充填

款部分は文字を損傷する危険があるので未処置にした。

- ・胸部の亀裂の溝に緩めに溶いた砥の粉を充填。1回では溝が埋まらず2、3回繰り返す(写真8)。作業は継続中。

③令和3年10月8日

- ・乾いた砥の粉部分をペインティングナイフで削り、陶像本体のフォルムに馴染ませる作業。前面はボンドの接着により上部が迫り出しているのでズレ幅が大きく調整しにくい。後日電動ルーターを使ってみようと思う。ペインティングナイフはカッターほどの切れ味がないので少しずつ砥の粉をそぎ落とすには向いている。
- ・袖の欠損部分を削り本体のフォルムに馴染ませる。密着面に溝がありあらたに砥の粉を充填した。
- ・充填する砥の粉は乾くと体積が減り、痩せてしまうので何度か充填しなおす。背中部分は大丈夫のようだ。削りだしもうまくいった。

④令和3年10月9日

- ・亀裂の溝を充填した砥の粉がはみ出しているのでその部分を削り取る。ミニルーターを使ったので作業が捗った。袖の欠損部分はしっかり接合している。
- ・首元と襦袢の左襟部分は欠損していた。かなり細かい細工が必要でとりあえず砥の粉を盛り上げることにした(写真9)。



写真9 充填部分の削り出しと襟元の盛り上げ

- ・削りだした部分と袖の成型した部分に顔彩で彩色する（写真 10-1,10-2・口絵）。

本体の朱色が使用する顔彩より明るく調色が難しい。天然石の朱色ならば同じ色は同じ石からしかとれないことも確かにあるが、水性の絵の具は石を水につけると色濃くなるのと同じで、塗布中と乾燥後では色合いが違ふ。朱に茶、黄、胡粉を混ぜて試みるがなかなか納得できず。こればかりは試すしかない。

⑤令和3年10月12日

- ・軽く全体を乾拭きして砥の粉の汚れを取る。
- ・頭巾、首元、襦袢の襟、袴を塗る（写真 11-1, 11-2・口絵）。胡粉＋黒
- ・扇子を塗る。黒＋胡粉少量 扇面は表裏が金と銀に塗り分けられているそうなので、後で金を塗る予定。
- ・上着全体を塗る。朱＋胡粉＋紅＋黄＋黄土調色が難しかった。それでもかなり地色に近い朱色ができた。

ただし、テープ類の粘着剤を完全には隠せなかった。これ以上厚く塗るには顔彩ではなくオリジナルの彩色方法、おそらく水干と膠を使わなくてはならない。そうすると補修の彩色層と下の彩色層が強く結着してしまう。

将来修復する際にオリジナルの彩色層から補修の彩色層だけを除去することができなくなる。そのため今回は顔彩を薄く引く程度の補彩に止めた。

- ・上着の雲立湧模様を描く（写真 12・口絵）。臙脂＋朱＋胡粉 最初、表面の彩色から判断して臙脂で書き入れたがコントラストが強くなった。そのため朱と胡粉を混ぜ、現状の見栄えに合わせることにした。
- 模様は雲立湧模様のはずであるが描きこまれているのは変形の模様で、それを模して描き入れた。
- ・テープ類の粘着剤が残る部分に補彩を試みた。まだ跡は見える。

⑥令和3年10月13日

- ・襦袢の襟元を再成型し、胡粉を塗る。
- ・顔の汚れが除去されていない部分があったので

クリーニングの追加。首元に胡粉＋黄土＋朱による肌色を補彩した。

- ・着物の襟に胡粉＋黒＋深緑による緑灰色を塗り、菊花と井筒模様を補筆した（写真 13・口絵）。
- ・中啓と呼ばれる扇子は表が金、裏が銀の無地紙である。そこで上面には金を塗った。堅い筆で扱って下地の黒をさらし、これで補修作業はすべて完了した（写真 14・口絵）。

5. 取り扱い上の注意

所蔵者には補修内容をまとめた報告書を添えて返却した。取り扱いについて下記の通り付記した。

- ・上着左側の裾と袖は欠損していた。砥の粉と膠で成型したものを接着している。その部分を持ったり、ぶついたりしないように留意のこと。特に人形を置く時には注意すること。人形の下に紙や布を敷き、それを持ち上げることは厳禁。
- ・補彩は水溶性の顔彩を薄く塗っている。顔彩に含まれる膠は低濃度なので水分に弱い。濡れた手、汗ばんだ手でさわらないように留意のこと。

6. おわりに

中山人形「塙保己一像」は補修後まもなく所蔵先である秋田県立視覚支援学校に返却した。同校ではこの機会にと「塙保己一」について学ぶ講話会を開催している（註2）。同校職員と丸谷副主幹による講話に生徒たちは感心していたようだ。

新聞に掲載された陶像は専用と思われる黒塗りの台に載せられていたが、台の下部の斜めに走る緑灰色に誰も関心を示さなかったのは残念である。写真を見る限り、それは布テープの粘着剤が固着したものだ。当館で展示する予定らしいから、折りを見てクリーニングできるだろう。

長年、学芸員として勤めてきたが、美術教師だったことを忘れたことはない。忘れないために継続してきた絵画やデザイン、工芸の制作なのである。私淑した画家の薫陶を座右として、自分ができないことは教えられないとあれこれ励んできた40年は今回の補修のためにあったのかも知れない。新たに持ち込まれた破損した人形を見ているとそう思えて仕方ないのである。

註1 「縣内書肆の老舗」（秋田魁新報 昭和7年5月2日）

註2 「本来の装い、お披露目」（秋田魁新報 令和3年11月9日）